

## 重戦車が行く

‘10 秋 初日：湯浅～みなべ 55km

### < 旅人 >

思えば紀伊半島の旅は、2年前友の死から始まったものだった。山あり谷ありの旅だった。きっと正人君が導いてくれたのだろう。無事にやってこれた。その旅も今日で終わる。感慨深い。故に、今日だけは無様な走りにはできない。最後をしっかりと締めて彼に報告したい。

11月2日午前3時過ぎ、震度3の地震で目が醒めた。私は地震には超過敏だ。子供が小さい頃、仕事終了後の晩酌時に震度4の地震があり、妻が子供を起そうと大騒ぎしている最中、気づくと私はワインが並々と入ったグラスを片手に庭に出ていた。妻からは、「子供とワイングラスとどっちが大事な!!」と怒鳴られた。言い訳の余地なし。

あれ以来、地震の度にこのことを蒸返されるが、とにかく怖いのである。グラッときた瞬間、もう動いている。この日も、財布の入ったボトルホルダーとケイタイをひつつかみ廊下に出ていた。

こうなってはもう眠れない。みなべには14:00に着けばいいから出発は7:00でいいのだが、予定変更して4:30にスタートした。何事も早いに越したことはない。

湯浅は何と言っても醤油に尽きた。流石に醤油発祥の地だった。居酒屋は駅前の「かどや」にした。寡黙だが心温まる対応のご主人と、料理にきめ細やかさが窺える弟さんとが醸し出す雰囲気は、旅人の心を和ませてくれる。

そのお二人が作る料理を、地醤油とモロミでいただく。中でも、生シラスとシラス丼は極上だった。ネットリとして、こくと風味がいっぱい、「もうたまらんわい」である。

春以来相棒となったAPO傘を左腋に挟み、右手で懐中電灯を持ちゆっくりと走り始めた。もちろん蛍光タスキは掛けている。蛍光タスキは、昼間でもトンネルの中では掛ける。自分の存在を他にハッキリ示さなくてはならないからだ。ジャーニーランではいくら目立っても目立ち過ぎということはない。

気温は5℃だ。3日目からの木曾入りに備えてバックパックの重量が5kgを越えた。防寒用ブレーカー上下とタイツ、アンダーシャツがそれぞれ加わったからだ。ズシリと肩に食い込む。おまけに、ボトルホルダーと傘。合計7kgの装備だ。単純に考えれば、体重を7kg増やして走る様なものである。当然走りは重い。

私は、ジャーニーランはサポートなしでやるもの、と定義している。装備を持つのは当たり前だし、それに耐えることのできる身体づくりが大切だ。走るだけではなく、体幹をウェイトトレーニングで鍛える。筋肉を付けずに体重は増やさない。そうすると、強く、走れる身体になれる。速さはないが、背筋、腰、膝は傷まない。

ジャーニーランに嵌って3年が経つ。「石の上にも三年」というがハッキリしたことがある。只の旅好きのおっさんだということだ。手段が走りというだけのことだ。目的地まで行くのに、楽をするか(歩くのもかなりしんどいが)苦しむかの違いのみである。

初めの頃は、たぶん粋がっていたのだろう。人から「すごい」と言われれば気分が良かった。だが、そういうのは驕りだ。凄い事でも何でも無い。好きでやっている事に優劣はないし、つけるのも愚だ。それが解っただけでよしである。私はジャーニーランナー、只の旅人に過ぎない。

御坊までの25kmは、大きな峠を二つ越えすんなりとなした。昨秋お世話になった「花御坊」の前を7:30に通過する。イベリコ豚のシャキシャキ鍋が旨かった所だ。「また来たで」である。どんだけ和歌山県が好きなんだろう。表彰されてもいいぞ。

御坊の市街地を抜け天田橋を渡ると、あと25kmでみなべ町だ。右手にでっかい火力発電所が見えた。ここからはずっと海岸道路で、紀州灘の向うは太平洋だ。快晴だが、風が強く気温は上がらない。防寒手袋は着けたままで、汗ひとつかかなかった。

景色は抜群で、水平線を船が航行している。洋の広がりがこれほど分かるところは、そうざらにはないだろう。予想通り、この海岸線が紀伊半島では一番だった。

大漁港のある印南を通過し、熊野街道を順調に進み、みなべ駅に着いたのは11:30だった。雨にも負け風にも負けてへたり込み、電車に乗った場所だ。あの日は雨だったが今日は快晴だ。これで紀伊半島が繋がった。3年もかかったなあ。

早く着いたのはいいが、ハテ？これからどうしよう。そうだ！近くに白浜温泉があった。せっかく紀伊半島を旅したのだから、有名な南紀白浜を訪れない手はない、ということでやって来た電車に飛び乗った。特急で20分の距離だった。

ところが白浜駅の観光案内所で尋ねると、駅周辺5km以内には温泉はないと言う。行くのなら巡回バスに乗らねばならない。どうも大分県人は、温泉というと別府感覚でいくらしい。当然、駅の近くには立ち寄り温泉があると思っているのだ。

どっシラケである。宿泊予定のホテルのチェックインタイムを15:00だと確認し、駅前食堂で和歌山ラーメンと生ビール大をいただき、初日のジャーニー終了を祝った。

紀伊半島の旅で、目ぼしい街には泊るか立ち寄って昼食をとるかしたが、新宮だけは素通りした街だ。JR「くろしお号」と「ワイドビュー南紀号」の終着、始発駅でもあるし、躊躇わずここでの宿泊を決めたのだ。

その新宮に15:00前に到着し、駅前のステーションホテルにインした。15:00にホテルチェックイン出来れば大余裕だ。風呂を浴びコインランドリーで洗濯物を回し、外に出てお目当ての居酒屋「はまやす」を探すと、なんとホテルの真前にあった。開店時刻を確かめてホテルに戻り、しばし昼寝を決める。

旅を続けている内に私の頭の中では、旅＝居酒屋という方程式が作られた。レストランや焼肉屋ではダメだ。人との出会いがない。居酒屋、しかもできるだけ小さい方がいい。座る場所は勿論カウンターである。だから、事前に宿泊地の居酒屋を探すことにしている。

ネットで丹念に調べるのだが、ハズレることは滅多にない。「はまやす」もそうした店だが、大当たりこの上ない居酒屋だった。人と酒と料理、私の拙い文章力で描写するにはおこ

がましいほどのすばらしい店だった。

店の善し悪しはお客さんを見ていけば分かる。常連さんから新参さん。私はこの夜、開店直後の 17:00 から 22:00 まで延々と 5 時間もいて、三組の方々と話しを弾ませたのだ。どの方も忘れえない。

先ず肴に、ゴンドウ鯨とビンチョウ鮪の刺身をもらう。この地ではこの組み合わせが一番だ。これを食いに来たと言ってもいい。

生ビールは 2 杯で切り上げ日本酒に行った。海の幸に合うのはやはり日本酒だ。銘柄はもちろん「太平洋《小西酒造》」である。一昨秋、熊野市で飲った時には辛口だと思ったが、甘口だそう。それを冷酒でいただいた。なるほど、言われてみればスッキリさよりまろやかさの方が際立つ。肴の追加に、鯨の竜田揚げと酢ガキを注文した。

「はまやす」のご主人は、角刈りの胡麻塩頭に老眼鏡を後ろ掛けし、目がギョロっとした気さくで元気のいい方だった。奥さんはすごく控え気味の人で、時々ご主人の話に小声で突っこみを入れるのが可笑しくて漫才みたいだった。料理といい雰囲気といい、ロコミ No1 なのも頷けるが、そのことを告げると当の本人はキョトンとしていた。関心なしだった。

旅は、いくら道中がよくてもその日のメが不味くてはダメだ。「旅」の語源は「食べ」だという一説がある。かつて芸人達が各地を放浪し、芸を披露して「食べ」ていたことに由来するそう。一方「旅行」は「旅軍」というように、軍隊の移動を意味する言葉らしい。乗り物に乗ってするのが後者だろう。その意味では、自転車によるのも「旅行」のようだ。所詮マシンってところか。私のは、自分の脚だけで走って歩いて「食べ」るから、正真正銘の旅ということになる。その旅のメの Max が「はまやす」のここからであった。

最初に現れたのは、退職政府高官風の 75 歳の方だった。背筋が伸びて態度が毅然としていた。私の隣に座り、いきなり「あなたの食べているものは何ですか。」ときた。「鯨と鮪、酒は太平洋」と応えると「私も同じものを」と注文した。熊野古道ツアーでやって来たそう。3 度目だと言う。

話は食材から富士山へと飛んでいった。私が、さつた峠( 静岡県由比町 )から眺めた富士は最高だった、と話す。「私は 23 回富士山に登っている」と返ってきた。只者ではない。

最後に「私は現職中には川崎に住んでいたんですが、退職してからは横須賀に住んでいます。三浦半島から見る富士の姿もいいですよ。」と締め括って帰っていった。30~40 分はいただろうか、引き際が鮮やかだった。

これで私は、富士山の周りを旅しなくてはならなくなった。ヒョンな出逢いから夢が膨らんでいく。天城越えを含めて、富士一周をいつかやりたい。

入れ替わりに入ってきたのが「はまやす」常連、愛須巧( あいすたくみ )さんだ。名前の通り、愛すべき方だった。かなりメタボで、今は建機会社の社長さんだが、昔はプロゴルファーだったとのことだ。プロゴルファーの方ともよく出逢う。私が学生時代、学士プロの元祖である入江勉プロにショートアイアンでのスライスの打ち方を教わった、と話す。「彼ならワシもよう知っとるで」となった。なんでこうなる!! こりゃあ、たまりませんわ。

様々な話に花を咲かせ、2 時間程して帰って行った。至福の時なり。太平洋の冷酒 1 本と牡蠣フライを「これ食べて行ってや。新宮にまた来た時は、声をかけてくれなアカンで。」

と置注文してくれた。冷酒はこれで4本目だが、ありがたく頂いた。

ぼちぼち腰を上げないと、と思っていたところへ壮年のカップルが入ってきた。男性はご主人の同級生で、「ヤメテケレ！ヤメテケレ！ゲバゲバパッパヤー!!《老人と子供のポルカ》」の左ト全そっくりの方だった。女性は私と同じ年で、メチャメチャな和風美人だった。てっきり夫婦かと思い、失礼にならない程度で関係を尋ねると、「ボランティアでこの人の世話をしています。」と彼女。世の中には不思議なカップルがいる。

それから1時間程バカ話をし、退散したのは22時前だった。楽しこの夜!!!

「人と酒と食」をテーマに旅を続けているが、紀伊半島はこれで終わりだ。たくさんの思い出を創ってくれた三重県と和歌山県、機会あらばもう一度訪れたい。特にこの「はまやす」には絶対来なければならない。ご主人と奥さん、料理と酒、そしてその常連さん達に会うために。

#### 《 ジャーニーラン標準スタイル 》

